

整理

次の空欄に本文中の語句を補って内容を整理しなさい。

第四段落 (一四二〜終わり)	第三段落 (一七〜四一)	第二段落 (一〇八〜一一六)	第一段落 (初め〜一〇八)
<p>老婆の話聞くうちに下人の心にある〔13〕 れ、老婆の着物をほぎ、急なはしごを〔14〕 け下りた。外には黒洞々たる夜があるばかり。〔15〕 の行方は、だれも知らない。</p>	<p>〔12〕 せぬためにやむなくしたと語った。 老婆の話聞くうちに下人の心にある〔13〕 れ、老婆の着物をほぎ、急なはしごを〔14〕 け下りた。外には黒洞々たる夜があるばかり。〔15〕</p>	<p>〔9〕 が、いや、 むしろあらゆる〔10〕 への反感が強さを増してきた。 楼上へ飛び上がった下人は、老婆をねじ倒し得意と満足を得 るが、老婆の行為の理由が存外平凡なのに〔11〕 を感じ、再び憎悪を覚える。老婆は、悪いことかもしれぬが</p>	<p>ある日の〔1〕 れ果てた〔2〕 の下で〔3〕 を待つて いた。〔4〕 しないためには、〔5〕 に なるよりほかしかたがないが、それを肯定する勇気が出ず、 門の上で夜を明かそうとはしごに足を踏みかけた。 はしごの一番上で、死体から髪の毛を抜く〔6〕 を 見た下人は、〔7〕 と〔8〕 とに動か されるが、次第に老婆に対する〔9〕 が、いや、 むしろあらゆる〔10〕 への反感が強さを増してきた。</p>

学習のポイント

1 この小説の舞台となっている羅生門の周辺の様子を整理すると次のようになる。空欄に適する語句を補いなさい。

- 広い門の下には、〔1〕 のほかに誰もいない。
  - 所々丹塗りの剥げた、大きな円柱に、〔2〕 が一匹とまっている。
  - 門の〔3〕 などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。
  - 狐狸や〔4〕 が棲み、引き取り手のない〔5〕 が捨てられている。
  - 〔6〕 が門の上の死人の肉を啄みに来て、何羽となく輪を描いて飛び回っている。
  - 崩れ目に長い草の生えた石段の上に、〔7〕 が点々と白くこびりついている。
  - 〔8〕 は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつという音を集めてくる。
  - 〔9〕 は次第に空を低くして、門の屋根が、斜めに突き出した甍の先に、重たく薄暗い〔10〕 を支えている。
- 2 「旧記によると」と、〔10〕 という表現の効果について次のように説明した。空欄に適する語句を選び、記号で答えなさい。  
語り自体が古い記録を参照しているものであることを印象づけ、語りに「 」があると思わせる効果がある。
- ア 虚構性    イ 真実性    ウ 再現性    エ 積極性

3 羅生門の下で雨やみを待つ下人の心理の移り変わりを、次のように整理した。空欄に適する語句を補いなさい。

思案の 出だし	何をおいても差し当たり〔1〕 をど うにかしよう。
一般化	〔2〕 どうにもならないことを、どうにかするためには、 〔3〕 を選んではいられない。そうしていたら するだけだ。
仮定	選ばないとすれば…
結論	〔4〕 になるよりしかたがない。

4 「この『すれば』は、結局『すれば』であった」(二〇二〜二一三)とあるが、この状況を打破するためにこの時点で下人に欠けているのは何か。本文中の一単語を抜き出して答えなさい。

5 「すぐにそれと知れた」(二二一)の「それ」は何をさすか。本文中から該当する部分を抜き出さない。

6 「ある強い感情」(二二五)とはどのような感情か。具体的に述べられている部分を、本文中から一二字で抜き出さない。

7 「恐怖が少しずつ消えていった」(二二〇〜二二一)のはなぜか。簡潔に説明しなさい。

8 「老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた」(二二二)について次のように説明した。空欄に適する語句を本文中から補いなさい。  
老婆に対するといふより、むしろ〔1〕

- 〔2〕 に対する反感が増してきたのである。下人には、なぜこの老婆が
- 〔3〕 〔4〕 いずれに判断することもできない。しかし、この
- 雨の夜にこの〔4〕 の上でそのようなことをすることが、それだけですでに許すべからざる〔5〕 であった。つまり、下人の心に非合理的な倫理観が働いて、恐怖心が消え、激しい〔6〕 の心が生まれたのである。

9 「すると、その気色が、先方へも通じたのであろう」(二三四〜三五)について次のように説明した。空欄に適する語句を補いなさい。  
下人の抱いた、〔1〕 と〔2〕 が入り混じった心情が、老婆に対して伝わった。

- 整理**
- ①暮れ方 ②羅生門 ③雨やみ ④飢え死に ⑤盗人
  - ⑥老婆 ⑦恐怖 ⑧好奇心 ⑨憎悪 ⑩悪 ⑪失望
  - ⑫飢え死に ⑬勇氣 ⑭夜 ⑮下人

**整理の解説**

この小説は、全体を四段落に分けることができる。それぞれの段落における場所、登場人物の動き、心理を的確に整理する。第一段落では、羅生門の荒れ果てた様子や下人を取り巻く状況を、本文に沿ってしっかりと把握する。第二段落では、下人が何を見出したのか、またそれに対する「恐怖」「好奇心」「憎悪」といった感情の動きを押さえることが肝心。第三段落では、老婆に対する下人の心理の変化、老婆の話における論理をとらえる。第四段落では、老婆の論理と下人のかかりについてまとめる。

- 学習のポイント**
- 1 ①この男(下人) ②蟋蟀(きりぎりす) ③修理
  - ④盗人 ⑤死人 ⑥鴉 ⑦鴉の糞 ⑧雨 ⑨夕闇 ⑩雲
  - 2 イ
  - 3 ①明日の暮らし ②手段 ③飢え死に ④盗人 ⑤勇氣
  - 4 上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこごと、動かしているらしい。
  - 5 六分の恐怖と四分の好奇心
  - 6 例老婆が髪の毛を一本ずつ抜いていることがわかって少しづつ冷静になり、事態を理解できるようになってきたから。
  - 7 ①あらゆる悪 ②死人の髪の毛 ③善悪 ④羅生門 ⑤悪 ⑥憎悪

この設問をふまえたうえで、自分はこの作品をどう読むのかについて改めて考えるようにしたい。

- 言葉の学習**
- 1 ①いっぴき ②くだ ③みちばた ④こと
  - ⑤けしき ⑥たきぎ ⑦よは ⑧ろう ⑨むぞうぎ
  - ⑩うれ ⑪ざんじ ⑫しらが ⑬えり ⑭か ⑮ゆくえ
  - 2 ①願 ②格別 ③衰微 ④遠慮 ⑤縮 ⑥覆
  - ⑦未練 ⑧成就 ⑨鋭 ⑩憎悪 ⑪失望 ⑫冷然
  - ⑬捕 ⑭奪 ⑮揺
  - 3 ①どうしたらよいかわからなくなる。
  - ②決着をつける。
  - ③用語が適切でないために誤解や弊害を招く。
  - ④寛大に扱う。

良識派

- 整理**
- ①自由 ②人間 ③金網 ④カギ ⑤うますぎる
  - ⑥仲間はずれ ⑦良識派
- 整理の解説**
- この文章は短い寓話である。形式段落に従って五つの段落と考えて読めばよい。

- 学習のポイント**
- 1 ニワトリ小屋・オリ
  - 2 ウ
  - 3 どうも話がくさるだろうか？
  - 4 ウ
- 学習のポイントの解説**
- 1 言い換えを確認する設問。表現の違いが視点の違いを表すことに注意する。人間にとって都合よく表現すると「金網つきの家」だが、客観的には「ニワトリ小屋」、ニワトリにとっては「オリ」である。

- 9 ①憎悪 ②(冷ややかな)侮蔑
- 10 例盗みをするを積極的に肯定する勇氣
- 11 ①悪い ②干し魚 ③飢え死に ④大目 ⑤悪(悪い) ⑥女
- 12 ア
- 13 ウ

**学習のポイントの解説**

1 教科書本文に沿って羅生門の描写を丁寧に読み取って、いけば問題なく解答できる。羅生門周辺のこのような描写が、小説世界の雰囲気や決定している。

2 表現の効果を考える設問。この一文は、物語の中の時間進行からは離れ、「古い記録を参照している」、つまり、語り手が物語の外側から客観的に物語にかかわっている、という構造を示している。その結果、物語に真実味が増える効果が生まれるのである。

3 老婆に出会う前の下人の心理を整理する設問。補う語句はすべて本文中のものである。冒頭から一〇八一までを読み返しながら埋めていく。

4 前問からの流れで下人の心理を追い、この作品のキーワードの一つに注目させる設問である。本文の後の一文を読めば解答は容易。

5 指示語の内容を確認しながら場面を把握する設問である。なぜ知ることができたかは、すぐ前の文「……」でわかる。何を知ったかはその前の文にある。指示語を丁寧に順を追って読むよう心がける。

6 語句の言い換えを確認する設問。はじめに「ある強い感情」と抽象的な表現で示し、その具体的な内容を後に示している。下人の驚きぶりを効果的に示す表現である。下人はここで「ある強い感情」によって「鼻を覆うことを忘れていた」が、読み進むと、「忘れていた(一一〇五)」という表現がまたある。言い換え問題ではその前後にも同じような表現が出てくるのでヒントになる。

- 学習のまとめの解説**
- 1 表現の意図を考える設問。ニワトリの警戒をかわし、「平和的」を演出する笑いである。
- 2 文脈が把握できていれば解答は容易。人間が話した部分も確認しておく。
- 3 文脈から解答はウ。なぜ家や食事を提供してくれるのか、その目的が不可解なのである。「話がうまい」の使い方にも注意する。
- 学習のまとめ**
- ①ネコ ②イタチ ③家 ④警戒 ⑤平和 ⑥決心
  - ⑦出入り ⑧危険 ⑨話 ⑩誠意 ⑪スパイ ⑫良識派 ⑬オリ

本文の表現に即して内容を整理する設問。短い文章だが、一語一語に意味が込められているので読みとばさないうようにしたい。

- 言葉の学習**
- 1 ①原始 ②危険 ③金網 ④警戒 ⑤理屈 ⑥誠意
  - ⑦結局 ⑧改
  - 2 ①試合・調査・探検などのために遠くへ出かけること。
  - ②相手方・敵方の機密情報をひそかに探り出すこと。また、そのようなことをする人。
  - ③証拠を示して明らかにすること。
  - ④社会人としての健全な判断力。

鏡

- 整理**
- ①幽霊 ②超能力 ③怖い ④中学校 ⑤夜警 ⑥変
  - ⑦僕 ⑧鏡 ⑨僕以外 ⑩鏡 ⑪僕自身 ⑫自分自身
  - ⑬鏡
- 整理の解説**
- 構成は、四段落に分けられる。一行あきがあるので、

- 7 初めは恐怖と好奇心で息をするのも忘れ、「頭身の毛も太る」ように恐ろしさを感じていたが、老婆の行為がわかり、時間的経過もあつて、少しずつ落ち着いてきたと考えられる。それと同時に、じわじわと憎悪が生まれてくるのである。
- 8 下人の老婆に対する気持ちを整理する設問。一一〇〜一一一ページを読み返しながら、本文中の語句を補う。補った後で完成文を読み返すことで、下人の複雑な心理状態を確認できる。
- 9 「その気色」とは何をさすか、語句の意味と本文中での内容をしっかりと把握する。「気色」とは、表情や態度に表れた心中の様子のこと。「その気色」とあるので、前の一文を読めば「憎悪」と「侮蔑」というキーワードが容易に見つかる。
- 10 この一文の後に、「それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。」とある。4で確認したとおり、その時点で欠けていたのは、「盗人になるよりほかに仕方がない。」ということ、積極的に肯定するだけの「勇氣(一一〇七五〜一一〇八一)」である。
- 11 老婆の言い訳と、そこに表れている老婆の論理を整理する設問。
- 12 下人の心情を整理する設問。「冷然として(一一四二)」老婆の話を知っている下人は、共感したり、正当なことに判断しているわけではない。ウのように考えていることが、この後の下人の行動と言葉からはつきりする。
- 13 「ように」「ような」とあることから、アの「直喩(明喩)」。

**学習のまとめ**

- ①天災 ②勇氣 ③憎悪 ④反感 ⑤弱さ ⑥極限

**学習のまとめの解説**

この作品のあらすじを振り返りつつ主題を考える設問。問題文・語群を手がかりにまとめる。鑑賞の一例なので、

- 学習のポイント**
- 1 ①生の世界 ②死の世界 ③クロス ④予知
  - ⑤常識 ⑥現象や能力
  - 2 ウ
  - 3 ア
  - 4 イ
  - 5 例六〇年代末の紛争の中で、なにかといえば体制打破を唱えるような風潮。
  - 6 大学に進むことを拒否して、何年間か肉体労働をしながら日本中をさまよってたんだ。
  - 7 ①十年以上 ②中学校 ③夜警 ④怖い
  - 8 台風が近いから
  - 9 ①例壊れたプールの仕切り戸が、風にあおられてばたんばたん鳴る音。
  - ②例ひどく混乱した人間が首を振ったり肯いたりするみたいな感じではたんばたん開いたり閉じたりする音。「うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……」という感じの音。
  - 10 ①予感 ②暗闇 ③恐怖 ④鏡 ⑤自分 ⑥安心
  - 11 ア
  - 12 エ
  - 13 例孤独で冷酷で、一切の妥協を許さない、という印象。
  - 14 ウ
  - 15 ①憎しみ ②コントロール ③無意識
  - ④幽霊 ⑤体験談 ⑥怪談 ⑦考察

- 学習のポイントの解説**
- 1 「僕」の体験談の前提となる部分を整理する設問。教科書本文に沿って理めていく。
- 2 なぜわざわざ前置きをしているかを考える設問。前

語句・文法の学習

- 1 次の語句の読みを現代仮名遣いで答えなさい。
- ① 言ひける (103)
  - ② 待ちぬたる (107)
  - ③ さぶらはん (107～8)
  - ④ 思へども (108)
  - ⑤ いらへん (108)
  - ⑥ 食ひに食ふ (111)
- 2 次の古語の意味を調べなさい。
- ① かいもちひ (102～3)
  - ② 心寄せに (103)
  - ③ いらへんも (108～9)
  - ④ 念じて (109)
  - ⑤ あなわびし (111)
- 3 次の傍線部分の語句の品詞名を答えなさい。
- ① 児ありけり。(102)
  - ② 児ありけり。(102)
  - ③ かいもちひせん。(102～3)
  - ④ わろかりなん(104)
  - ⑤ な起こしたてまつりそ。(1010)

学習のポイント

- 1 「さり」とて、<sup>①</sup>しいださんを待ちて寝ざらんも、<sup>②</sup>わろかりなんと思ひて、<sup>③</sup>片方に寄りて、寝たるよしにて、<sup>④</sup>出で来るを待ちけるに、「(103～5)の傍線部①～④の主語は誰(何)か。適当なものを選び記号で答えなさい。

ア 比叡の山 イ 児 ウ 僧たち エ かいもちひ

①	②	③	④

- 2 僧たちの会話や様子を耳にして、児はどのように思ったか。児の心中を表す部分を本文中から抜き出して答えなさい。

僧たちの会話・様子		児の心中	
①	「いぎ、かいもちひせん。」(102～3)		
②	ひしめき合ひたり。(105～6)		
③	「もの申しさぶらはん。驚かせたまへ。」(107～8)		
④	や、な起こしたてまつりそ。幼き人は寝入りたまひにけり。(1010)		

- 4 「驚かさんずらん」(107)、「驚かせたまへ」(108)について解説した次の文章の空欄に適当な語句を補いなさい。

現代語の「起きる」に相当する古語は「<sup>①</sup>」であり、「起こす」に相当する古語は「<sup>②</sup>」である。本文中には、「驚かさんずらん」と「驚かせたまへ」という表現が出てくるが、このうち「<sup>③</sup>」の方が「起きる」の意味で、「<sup>④</sup>」の方が「起こす」の意味である。

整理

次の空欄に適当な語句を補って内容を整理しなさい。

第二段落 (一〇7～終わり)	第一段落 (初め～一〇6)
<p>昔、比叡山に児がいた。宵に僧たちが「<sup>①</sup>」を作ろう。」と相談するのを聞いて、寝ないで待っているの  <sup>②</sup>「<sup>③</sup>」  <sup>④</sup>「<sup>⑤</sup>」をして  <sup>⑥</sup>「<sup>⑦</sup>」  <sup>⑧</sup>「<sup>⑨</sup>」</p>	<p>昔、比叡山に児がいた。宵に僧たちが「<sup>①</sup>」を作ろう。」と相談するのを聞いて、寝ないで待っているの  <sup>②</sup>「<sup>③</sup>」  <sup>④</sup>「<sup>⑤</sup>」をして  <sup>⑥</sup>「<sup>⑦</sup>」  <sup>⑧</sup>「<sup>⑨</sup>」</p>

- 3 この話では、はじめは児の思ったとおりに事が進んでいったが、途中から事態は児が予期せぬ方向へと進んでいってしまう。なぜそのようなになったのか、簡潔に説明しなさい。

- 4 「児」のことを他の言葉で何と言っているか、本文中から抜き出して答えなさい。

- 5 「僧たち笑ふことがぎりなし。」(114～5)とあるが、なぜ僧たちは笑ったのか。適当なものを選び記号で答えなさい。

ア いくら起こしても起きなかった児が、僧たちの食べる音で目を覚ましたから。  
 イ 児が食べたいのを隠そうとして眠ったふりをしていたことがかわいらしかったから。  
 ウ 僧たちが食べ終わってしまった後になって、やっと児が目覚めましたから。  
 エ 児が食べたさから無理をして夜遅くまで起きていたのに、肝心なところで寝てしまったから。  
 オ かなり時間が経ってから児が「はい。」と返事をしたことが愚かに思えたから。

語句・文法の学習

- ① いいける ② まちいたる ③ さぶらわん ④ おもえども ⑤ いらえん ⑥ くいにくう
- ① ぼたもち／おはぎ ② 期待して ③ 答えるのも ④ がまんして ⑤ ああ困った
- ① 動詞 ② 助動詞 ③ 助動詞 ④ 形容詞 ⑤ 副詞
- ① 驚く ② 驚かす ③ 驚かせたまへ ④ 驚かさずらん

語句・文法の学習の解説

- ①～④の傍線部分の語の活用の種類と終止形および本文中での活用形は次の通り。  
① 行変格活用動詞「あり」の連用形  
② 過去の助動詞「けり」の終止形  
③ 意志の助動詞「ん(む)」の終止形  
④ ク活用形容詞「わろし」の連用形
- ① 「驚く」は自動詞、② 「驚かす」は他動詞。③ 「驚かせたまへ」は、「驚か+十+せ+十+たまへ」。「驚か」は「驚く」の未然形、「せ」は尊敬の助動詞「す」の連用形、「たまへ」は尊敬の補助動詞「たまふ」の命令形。「お起きください」「お目覚めになってください」の意。④ 「驚かさずらん」は、「驚かさ+十+んず+十+らん」。「驚かさ」は「驚かす」の未然形、「んず」は推量の助動詞「んず(むず)」の終止形、「らん」は現在推量の助動詞「らん(らむ)」の終止形で、「起」してくれるだろう」の意となる。助動詞については、教科書三四ページ「古文を読むために4・助動詞と助詞」、敬語については、教科書四三ページ「古文を読むために5・敬語」を参照。
- 整理**  
① ぼたもち／おはぎ ② よくない ③ 寝たふり ④ 返事

- ① せむ ② いづ ③ きる ④ す ⑤ もゆ ⑥ こころう

語句・文法の学習の解説

- 傍線部分の語の活用の種類と活用形は次の通り。  
① マ行下二段活用動詞「せむ」の連用形  
② タ行下二段活用動詞「いづ」の連用形  
③ カ行上一段活用動詞「きる」の未然形  
④ サ行変格活用動詞「す」の連用形  
⑤ ヤ行下二段活用動詞「もゆ」の連用形  
⑥ ア行下二段活用動詞「こころう」の連用形

整理

- ① 絵仏師 ② 妻子 ③ 笑って ④ もうけもの ⑤ 火炎 ⑥ 仏 ⑦ よじり不動

学習のポイント

- 人の書かすありけり。
  - 良秀が、家の焼けるのを笑いながら見ていること。  
(1) 霊や魔物がとりついて正気を失うこと。(2) イウ
  - 絵仏師としての道
  - 良秀の仕事にかける執念がすばらしい作品を生んだとして賞賛する気持ち。
  - ① 宇治拾遺物語 ② 仕事 ③ 芥川龍之介 ④ 地獄変
- 学習のポイントの解説**
- 「それも知らず、…」の主語は良秀。この時、良秀は火事になった家を出て大路にいる。「それ」は、良秀が家を出た後「知らず」にいる家の中の様子をさす。
  - 「あさまし」は「驚きあきれ」の意。直前に「こはいかに、かくては立ちたまへるぞ。」とあり、火事を前にして立っている良秀の態度を見ての感想である。その良秀の態度のより具体的な描写は「向かひに立ちて、…時々笑ひけり。」(一四八～九)とあるので、こ

- ⑤ 待っていた ⑥ 起こして ⑦ 食べる ⑧ ずつとたつてから

学習のポイント

- ① ウ ② イ ③ エ ④ イ
- ① しいださんを待ちて寝ざらんも、わろかりなん ② 定めて驚かさずらん ③ うれしとは思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、今一声呼ばれていらへん

- ④ あなわびしと思ひて、今一度起こせかし

- ③ 児は僧が起こしてくれと思つていたが、僧が起こしてくれなかつたから。

- ④ 幼き人

学習のポイントの解説

- 「ざりとて」以下「わろかりなん」とまでは、児が思ったことを記した部分で、②「思ひて」の主語は児僧たちが「かいもちひ(＝ぼたもち)」を①「しいださん(＝作り出す)」のを、(自分が)待つて寝ないでいるのもよくないだろうと、の意で、①「しいださん」の主語は僧たち。「片方に」以下「待ちけるに、」までは、その後児がとつた行動を記した部分で、「かいもちひ」が③「出で来る」のを④「待ちける(＝待つていた)」のは児。③「出で来る」の主語は「かいもちひ」。
- 僧たちの会話や様子を耳にするたびに、児がどのように思ったか、それぞれを一組の場面としてとらえてみる。  
① 僧たちが「いざ、かいもちひせん(＝さあ、ぼたもちを作ろう)」というのを聞いて。1の解説を参照。  
② 「かいもちひ」ができあがつたら、きつと起こしてくれだろうと、期待して待つている。  
③ 起こされてすぐに起きたのでは、待ちかまえていた

- ① 物」は教科書注⑩を参照。「物のつく」は、正気を失つた異常な様子をさしている。(2)「物のつきたまへるか。」で、「霊や魔物がとりついて気がおかしくなれたのか。」の意。エの「怒りを感じた」は、心情的には理解できるが、人々は良秀の一連の行動を「あさましきこと」ととらえてはいるものの、怒りを感じていたとは本文からは読み取れない。良秀の行動を、人々の常識では理解できないものとするイが正解を、人々の常識では理解できないのか、ここでは良秀自らが「これこそ」とその答えを明かしている。「これ」が直接さすのは、その直前の良秀の言葉「かうこそ燃えけれど、心得るなり。」で、火がどのように燃えるかを会得した、ということ。

- 教科書注⑩を参照。「この」がさすものが具体的に文中に示されていないので答えにくい。この道を立てて世にあらん」と言っていることから、良秀の職業である絵仏師としての道をさすものと理解できる。
- イの「蔑み」とエの「憐れみ」のどちらを選ぶかで迷うところだが、良秀は、自分自身は「仏だによく書きたてまつらば、百千の家も出で来なん。」と豪語する一方で、人々に対しては「させる能もおはせねば、物をも惜しみたまへ(＝財産を惜しみなざるのだ。)」と言つており、人々を見下している様子がかがえる。
- 語り手(編者)によるまとめの一文。「今に、人々めで合へり。」という言葉には、良秀の「よちり不動」を、妻子を犠牲にすることも辞さない絵仏師としての執念が生み出したものであるとして、それを高く評価する気持ちが込められている。
- 芥川龍之介は、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典の説話を材料として、多くの小説を書いた。「地獄変」は、この良秀の説話をもとにして、芸術至上主義と人間性との葛藤をテーマとした作品。

- ようではしたくないと思ひ、ひとまず聞こえなかつたふりをする。

阿蘇の史、盗人にあひてのがること

- ④ 起こしてくれるものと思つていたのに、あてがはずれて、しまった、もう一度起こしてくれ、という気持ち。
- ②④の解説を参照。僧が起こしてくれなかつたのは、児にとつて大きな誤算だった。
- ④ 児を起こさないでおうとうという僧の言葉の中に見える。

- ⑤ この話は、(1)僧たちが児のそら寝に気づいていない場合と、(2)僧たちが児のそら寝に気づいていた場合の、二通りの解釈が可能である。ア、オの選択肢にも、(1)の場合についていうものと、(2)の場合についていうものの双方があるが、いずれの場合も本文の内容に合っているかどうかを見きわめる。(1)僧たちが気づいていない場合についていう(児が本当に寝ていたとする)のはア・ウ・エだが、ア「食べる音で目を覚ました」、ウ「食べ終わってしまった後になって」、エ「無理をして夜遅くまで起きていた」が、いずれも本文の内容に合わない。(2)僧たちが気づいていた場合についていう(児がそら寝をしていたとする)のはイ・オだが、僧たちの気持ちをうまく言い表しているのはイ。オ「愚かに思えたから」とあるが、僧たちが児をからかっている様子はいかがやけるもの、児が愚かであるとあざけて笑つているようには思われない。

絵仏師良秀

語句・文法の学習

- ① おしおおいて ② しようとかく ③ なんじょう ④ こうこそ
- ① そつくりそのまま ② どうしたのだ ③ ああ ④ 何年もの間 ⑤ よくない ⑥ 会得する

阿蘇の史、盗人にあひてのがること

語句・文法の学習

- ① そうぞく ② わらわ ③ ぞうしき
- ① たいそうだ／はなはだしい ② 内裏／宮中 ③ きちんとしている ④ 恐れつつしむ ⑤ まつたく(くない)
- ① ダ・下二段 ② ワ・上一段 ③ ガ・上二段 ④ ナ・変格
- ① 連体 ② 已然 ③ 係り結び ④ 強調 ⑤ 疑問 ⑥ 反語

語句・文法の学習の解説

- 係り結びについては、教科書二一ページ「古文を読むために3・係り結び」を参照。
- 整理**  
① 普丈 ② 牛車 ③ 脱いで ④ 盗賊 ⑤ 高い ⑥ 思いつかない ⑦ 能弁で機転のきく

学習のポイント

- ① (阿蘇のな)がしといふ 史 ② 牛飼ひ童 ③ 車ウ
  - (1) 盗賊に襲われ、衣服をはぎ取られてしまった。(2) 盗賊
  - エ
  - イ
- 学習のポイントの解説**
- 阿蘇の史が宮中から夜更けに「車に乗りて」家に帰る場面。「車」は牛車のこと。「やらせて」は「(牛車を)進ませて」の意。牛車の牛を追う人物は、ここには描かれていないが、教科書一九ページに「牛飼ひ童」とある。
  - 盗賊の出現を予想しての、史の機転のきいた行動。